

論文

ヴェブレン顕示的消費論の射程：「品位ある水準」の概念をめぐる

石田 教子

概 要 Abstract

本論文の目的はヴェブレンの顕示的消費論の射程を考察することである。顕示的消費といえば、見せびらかしの消費とか、価格が高くても選好される場合の消費と解説されることが多い。だが、顕示的消費を、初期の新古典派経済学が看過した特殊ケースとするだけの解釈は正確だろうか。本稿は、主著『有閑階級の理論』（1899）を対象にして、こうした一般的解釈に修正を迫る。

ここで「射程」とは、顕示的消費の考察を導きとして、彼が光を当てようとした副次的な諸現象を指す。例えば、消費理論という枠を超えて、次のような論究があったというのが本稿の結論である。顕示的消費論では社会関係が前提されており、人々はつねに他者の視線にさらされている。その意味では、個々人は価格シグナルにのみ導かれて自ら行動することはない。また、人々は所得額や消費量で表される生活水準のみならず、文化のおよび社会的な水準、すなわち「品位ある水準」を満たそうとする。したがって、幸福度は階層によって、人によって多様でありうる。そして、顕示的消費が標準となる経済では、出生率の低下、保守主義の浸透および社会改革の遅延、産業効率の低下などが進行する可能性がある。

はじめに

消費はその社会に暮らす人々の生活水準を映し出す。アメリカの経済学者ヴェブレン（Thorstein B. Veblen, 1857-1929）は、生活必需品の消費とそれを超える消費とを明確に区別し、後者を顕示的消費（conspicuous consumption）と呼んだ。今日ではよく知られているとおり、顕示的消費がもたらす効用は他者からの評価と切っても切れない関係にあり、良くも悪くも人々の幸福感に直結している¹⁾。Trigg（2001）は、ヴェブレンの議論が今なお新古典派の消費理論に対する強力な批判であると評価し、Edgell（1999）は、ヴェブレンの『有閑階級の理論』出版100周年を記念する寄稿において、消費が単に経済的に重要である以上に社会的および文化的にも重要であるという洞察を示したことこそが本書の意義であると述べている²⁾。また、Mason（1998）の考察に沿えば、ヴェブレンは消費行動における対人

1) Peukert（2005）のヴェブレン『有閑階級の理論』に対する評価は、T. シトフスキーの『喜びなき経済』（1976）、F. ハーシュの『成長の社会的限界』（1976）およびR. フランクの『正しい池を選ぶ』（1985）など、幸福研究における草分け的な業績と理論的に親和性を有するというものであった。

2) 主流派の消費理論との関係を探るうえでは、顕示的消費を例外現象ではなく、社会的援助プロセスにおけるルーティン慣行として捉え直す必要を説く Todorova（2013）も参照されたい。

効果を初めて経済学的に考察した人物ということになる。その意味では、彼は幸福かどうかは経済力だけではなく、社会的承認を得られるかどうかによっても大いに左右されることを早くから見抜いていた経済学者とってよいだろう。

しかし、ヴェブレンによれば、当時の経済学ではこの二つの消費は区別されていなかった。彼はこの問題に照準を定め、ゆたかさがあふれだす新時代のアメリカ社会を克明に描き出していく。すでにふれたように、先行研究では、社会性を含め再構成することによって、消費行動のより現実に即した説明を実現した点に消費理論史上の獨創性を認めてきたが、本論文では、さらに、彼の顕示的消費論の論理構造をオリジナルテキストに沿って解き明かすとともに、その射程についても考えてみたい。対象となるのは『有閑階級の理論』であるが、本書において、彼は根本的な問いをいくつか提起している。人はなぜ消費をするのか。生活水準はどのように定義されるか。本論文が目指すのは、そのような根本的な問いを下敷きにして、彼がどのような経済現象に光を当てようとしたのかという問題の解明である。

本稿の構成は次のとおりである。Ⅰでは、人はなぜ財を獲得し蓄えるかという人間の心理に関わる問いに焦点を当て、ヴェブレンが、支出する行為という表面的な理解を超えて、消費の社会心理的な側面に接近しようとした論理を考察する。つづく、Ⅱでは、ヴェブレンの生活水準の概念が、所得額や消費量のような量的な水準で記述されるだけでなく、その社会に暮らす人々が暗黙のうちにしがわざるを得ない文化的ないし慣習的な水準を包含しており、また、身体的快適さのみならず品位や体裁を保つための水準と位置づけられていた点を明らかにする。だが、こうした消費行動の社会心理的な側面に注目したヴェブレンは、まず上流の有閑階級の生活図式を詳細に検討しているが、その過程で消費や文化が高級であることをどのように捉えたのだろうか。この論点は、特に、古典派経済学者たちとの距離を測るうえで有意義であり、Ⅲにおいて取りあげる。そして、Ⅳからは、顕示的消費が社会全体に及ぼす影響について考察する。まずは、社会において保守主義が浸透するプロセスや、それにより社会改革が行き詰まる原因が検討される。最後のⅤでは、ヴェブレンが、こうした消費や生活水準をめぐる議論をつみかさねることによって、有閑階級制度が人々の暮らしに対してどのような経済効果をもたらすと考えたのかについて考察する。

Ⅰ 財の獲得と蓄積の目的

顕示的消費をめぐる議論は、主として彼の最初の著作『有閑階級の理論』(1899)において展開されている³⁾。本書の目的を確認しておく、「現代の生活における経済的要因としての有閑階級に着目し、その位置と価値を論じること」であり、本書の議論にはふつうは経済学の範疇とはみなされない事実も入り込んでくるという断り書きがある(Veblen 1899, v/訳3)。それには、生物進化論からの影響が関連している。

ヴェブレンは、チャールズ・ダーウィンから大きな影響を受け、その方法を経済学に応用したいと考えていた。彼によれば、当時の経済学は前ダーウィンの方法に依拠した時代後れの理論であった。そうした方法はすぐさま放棄し、進化論の方法に学ぶべきであるというのが彼の主張であった。そして、『有

³⁾ 正確には、顕示的消費という概念は1894年に発表された論文「女性のドレスの経済理論」に初出する。Cf. 「高価な財の顕示的な不生産的消費」(a conspicuously unproductive consumption of valuable goods) (Veblen 1934, 68)。なお、本稿における引用については、原典のページを先に記し、翻訳がある場合はスラッシュの後にそのページを付記した。訳文は必ずしも翻訳書にしたがっておらず、変更している部分も多い。

閑階級の理論』はそうした方法論上の提案の実践でもあったから、歴史叙述が多く、生物学、人類学および民族学由来と思われる概念や事例が頻出する⁴⁾。

そして、既存の経済学に対する批判を強く意識しながら⁵⁾、本書の前半で取り上げられたのは、人はなぜ財を獲得し蓄えるのかという一種の心理学的問いであった。ヴェブレンによれば、一般に、経済学では、財を獲得し蓄積する目的はその消費であると考えられてきた。確かに、人は生活の快適さを増加させようとして財を獲得し、消費したり蓄えたりする。そして、そのための人々の行動が経済を発展させもする。このことは否定し得ないだろう。しかしながら、この説明では、その消費の主体が所有者本人であるかその家族であるかは問われないし、消費する者の身体的欲求をみたすための支出なのか、より高級な欲求——すなわち精神的・美的・知的欲求——をみたすための支出であるかも問われない。ヴェブレンは、人が財を獲得し蓄積する目的は、生計を維持したり快適さを得たりするためだけではないのであり⁶⁾、それ以上に強力な目的が存在すると考えていた。その目的とは、張り合い(emulation)であり、これこそが「所有の根源にある動機」にほかならない(Veblen 1899, 25/ 訳 35)。ヴェブレンの消費理論においては、このように、消費は目的ではなく手段とされているのである。

ヴェブレンによれば、日々肉体労働に従事し生活の基盤が不安定で、財産をもたない貧しい階級であっても、身体的欲求にもとづく動機のみが支配的であるとは限らない。特に衣服などを考えれば明白であるように、いかなる階級であっても、身体を守るためだけではなく、見てくれを良くするために衣服を購入し着用する(Veblen 1899, 167-168/ 訳 167)。そうして同じ階層の隣人と張り合うのである。そして、上流階級の場合はなおさらこちらの目的の方が優勢であろう。彼らにとっては、生計の維持や身体的快適さは少しも重要な誘因ではない。働く必要のない上流の有閑階級は、これ見よがしに財を消費し、その経済力を隣人に見せびらかし、自尊心を存分にみだすことができる。

それでは、この張り合いを、人類はどのように身につけたのだろうか。人類学から得た知見を活用しながら経済史の再構成を試みるヴェブレンにとって、張り合いの起源を探ることは、階級の分化そのものの起源をたどることを意味していた。そのことは、有閑階級制度の発生を説明することにも通じている。議論は遊牧や狩猟を生業とする未開時代にまでさかのぼるが、最初に取り上げられるのは、人々が抱く尊敬と軽蔑の感情が生じる根拠である。

自然選択の結果として、人間は行為主体である。…人間はあらゆる行為のなかに何かしら具体的、客観的かつ個人的でない目的の達成を求める。彼はそのような主体であるから、効率的に働くことを好み、無駄な努力を嫌う。…こうした気質あるいは性向は製作本能(the instinct of

4) 人類学がヴェブレンの思想形成に与えた影響については、拙稿石田(2017)を参照されたい。『有閑階級の理論』の一般的な構想は少年時代にできあがったもので、最終稿は著名な人類学者F. スタールに部屋を間借りしていた時に仕上げられたと言われている(Dorfman 1972, 174/ 訳 250)。生物学および人類学の影響のもとで彼が既存の経済学を批判した論点は、主として人間行動に関する説明方法であった。この論点は、さらに経済学における歴史の描き方、因果関係の捉え方などにも影響を与えていった。これらの諸点については、拙稿石田(2018)において論点を整理している。

5) 「新古典派経済学」はヴェブレンの造語であり、彼の経済学批判と言えば、マーシャルや恩師J. B. クラークが主たる標的であったようにも見えるが、快楽主義にもとづく人間本性の一般化に対する批判の対象はより広い。同時代人のM. パンタレオーニのほか、スミスやベンサムに対しても同主旨の指摘がある。

6) ヴェブレンにおける快適さ(comfort)の概念は、多くの場合、身体的な快適さを指している。それは、ほとんどの文脈で“physical”という形容が施されていることから推測しうる。この点は、マルサスやマーシャルなど他の経済学者たちの思想と比較する上で留意しなければならないだろう。

workmanship)と呼ぶことができるだろう。…効率の良さを証明すれば尊敬され軽蔑を回避できる。結果として、製作本能は、張り合っ力を誇示するさいに成果を出すことになる。(Veblen 1899, 15-16/ 訳 25-26)

人を尊敬したり軽蔑したりして区別する傾向は、原始的な段階で人間が獲得した本能であるという。ヴェブレンによれば、初期の平和的な共同体では、個人の能力は主に集団の生活改善につながる活動において発揮され、自分がいかに生産活動に役立つかを競い合っていた。だが、道具にかかわる技術が発達すると、略奪を好む共同体へと移行しやすい⁷⁾。というのも、恐るべき大型動物をしとめることや戦闘において勝利することが、共同体に対する貢献にもつながり、尊敬に値する行為、言い換えれば、英雄的行為であると見なされるようになるからである。

もとより、ヴェブレンの考察によれば、尊敬と軽蔑の区別は、男女の分業に由来している。例えば、男は体格や気質などから、その多くが狩猟や戦闘に従事し、英雄とみなされる行為に駆り立てられ、成功すると尊敬された。それに対して、女はひたすら日常的な雑務をこなすだけで、英雄的行為にかかわることは稀であったから、尊敬の対象とはなりにくかった。しかし、ときには男らしい仕事をこなせない男も出てくるだろう。こうした男女の分業を基礎とした生活図式は、やがて身分を区別する上下関係を生み出した。男女の分業は次第に尊敬に値する職業とそうではない職業の区別に引き継がれたが、それは不生産的な職業と生産的な職業の区別、有閑階級と勤労階級の区別につながっていったからである⁸⁾。こうして、英雄的な有閑階級の職業として定着したのは、戦争、狩猟ないしスポーツ、宗教儀式、政治にかかわる職業であった。

ヴェブレンは、社会の進化の過程で有閑階級制度は私有財産制度と時を同じくして出現したと考える。それらは「その発展の初期段階では、社会構造の同一の一般的事実を違う切り口から見たものにすぎない」(Veblen 1899, 22/ 訳 32)。人間が本質的に効率を求め無駄を嫌う製作本能を有することはすでに述べた。平和的な原始共同体を経て略奪的な文化段階に入ると私有財産制度が確立されるが、そこで他者と張り合うための最も効率的な手段は、財を獲得し蓄積する行為となる。このようにして、製作本能は財力を張り合う動機と深く結びついていく。「蓄積された富をより称賛に値するかたちで誇示するよう導かれること、あるいは実際にそういう結果を出すことが、有意義な努力とされる」時代の到来である(Veblen 1899, 34/ 訳 42)。このようにして、財力をめぐる張り合いは人々を蓄積に駆り立てる最も強い動機となる。

そして、財の獲得と蓄積は、世間の尊敬を勝ちとる基礎となり、それゆえに「自尊心と呼ばれる自己満足を得る必須条件」(Veblen 1899, 31/ 訳 40)ともなる。本節の最初の問題に戻ると、経済学による一般的な説明では、獲得と蓄積の目的はまずもって消費であるとされてきた。しかし、ヴェブレンは、それよりも強力な目的として、張り合いを挙げた。このことは歴史を見ても明白であるという。なぜな

⁷⁾ この文脈は注意が必要である。厳密には、この一般化により、すべての共同体が「平和と善意の時代」から戦闘が日常である略奪時代に進むと主張しているわけではない。略奪的な文化においても平和的な生産活動が消滅するわけではないし、平和的な初期段階でも多少の争いは必ず生じたはずだからである。(Veblen 1899, 19/ 訳 29)

⁸⁾ 男女の分業は、さらにさかのぼると、未開の文化における生氣あること(animate)と不活性(inert)の区別に行き着くという。そこでは、生氣あることは生きていること(living)と同義ではない。生氣あるものは、嵐、病氣、滝などの自然の驚異や崇高さも含むのに対して、ハエやウジ、レミング、草木は生物でありながら不活性のカテゴリーに属すからである。前者は畏敬の念を起こさせる存在であり、それへの対処は、勤労ではなく英雄的行為、勤勉ではなく武勇と見なされた。(Veblen 1899, 11-12/ 訳 21-23)

ら、前者の目的が達成されても人々の欲求が満たされることはなかったし、後者の目的の達成は決して完了しないからである。

ときおり想定されるように、蓄積の誘因が生活必需品や身体的快適さの欠如であるならば、産業効率が向上するどこかの時点で、その社会の経済的欲求は全体として満たされると考えられる。だが、本質的にその闘争が他人に妬みを起こさせる比較にもとづく評判をめぐる競争である以上、最終的な到達地点に近づく道はありえないのである。（Veblen 1899, 32/ 訳 41）

ヴェブレンは、経済学において、こうした競争が一般に生存競争と解釈されてきたことに注意を払っている。しかしながら、彼の解釈では、実際の競争、特に現代における競争は生きるか死ぬかの生存競争ではなく、精神上の競争だということになるだろう。というのも、彼の仮説が正しければ、財の獲得と蓄積の目的は、隣人に妬みを起こさせ悔しがらせることによって、自らの心の平安を守ることだからである。したがって、この競争は決して終わらない。人々は財を新たに獲得しても、すぐに現在の生活水準に慣れてしまい、すぐさまそこから満足を得ることはできなくなり、再び新たな水準の生活を求める競争に参入せざるをえないからである。尊敬を勝ち取れるか軽蔑されるかはつねに背中合わせであり、自尊心を保つための息苦しい張り合いが延々とつづくのである。

II 品位を保つという至上命令

ヴェブレンは、人から尊敬されるためには、単に富や権力を持っているだけでは不十分であると論じている。尊敬の念というものは証拠に対して与えられるのであり、富なり権力なりが証拠を伴って人々に示されなければならない。したがって、消費を見せびらかす以前に、上流のゆたかな階級が証拠として示したのは、閑暇を享受できる彼ら自身の姿であり、言い換えれば、生産的労働を免除されている事実であった。ヴェブレンが上流階級を有閑階級と呼んだ所以はここにある。しかし、閑があることは何もしいことを意味しない。彼のいう閑暇は時間の非生産的な消費（non-productive consumption of time）にほかならない。有閑階級は、第一に、生産的労働は卑しいという感覚から、第二に、怠惰な生活を送れるだけの財力があることを誇示するために、時間を非生産的に消費する（Veblen 1899, 43/ 訳 52）。

具体的な例を挙げよう。閑暇には、例えば、「古語や神秘学、正書法・頭語法・音律論に関する知識、さまざまな種類の家内音楽やその他の家内芸術の知識、衣服・家具・調度品に関する最新の作法の知識、娯楽、スポーツ、犬や競走馬など愛玩動物についての知識」などが該当する。そして、それらの多くは「物的生産物」を生み出さないし、「『非物質的』財」の形態を取る（Veblen 1899, 45/ 訳 53）。一言で言うなら、嗜み（accomplishment）である。礼節も嗜みも、閑暇なしには発展しえない。なぜなら、こうした知識の習得には時間がかかるからである。したがって、これらの知識は生計を維持するためにあくせく働かなければならない階級の手にはどうも届かない。それゆえに、これらの知識の習得が上流階級に所属する証拠となるし、これらの知識に通じていないことが少しでも明らかになるなら、格下の階級という烙印が押されることになる。

これらの議論から浮かび上がるのは、ヴェブレンにおける生活水準の概念は、所得額や消費量のように貨幣額で表記できるような量的な概念というよりはむしろ、社会的および文化的な概念であり、非物

質的な知識——教養や作法——の水準を包含するより広い概念であったということである。したがって、それは身体的快適さの水準にとどまるものではなく、品位ないし体裁を保つための水準をも含む。

ヴェブレンによれば、有閑階級にとって、品位を保つことは至上命令である。だが、顕示的消費は、彼の最も狭い定義にしたがえば、「理念的には、生活の必要最低限を超えるすべての消費」(Veblen 1899, 73/ 訳 79)を指している。このことは、顕示的消費の実行者が有閑階級に限定されないことを意味している。彼によれば、「卑しい勤労階級は生存に必要なものだけを消費すべきだというのが、多かれ少なかれ厳格に適用される一般原理となる」(Veblen 1899, 70/ 訳 76)が、有閑階級制度は、「慣習法のような力」をもっていた(Veblen 1899, 73/ 訳 79)。歴史の過程でさまざまな主従関係——主人と奴隸、使用人、妻——が存在したが、こうした関係性のなかで、有閑階級制度が形成した顕示的消費の原理は、代行的な閑暇や消費という形式を取りながら、上から下へとしたり落ちるように伝播ないし派生してきた。いわば、富ならぬ慣習のトリクルダウンである。

そして、ヴェブレンが目にするのは、下層階級がこの一般原理にしたがうとき、上流階級とは比べものにならないぐらいの影響を受けることである。貧しい階層には好きなだけ散財をする余裕はない。ところが、ヴェブレンによれば、極貧の階級においてさえも、この顕示的消費の一般原理はしっかりと作用する。低い階層では、夫が贅沢な消費をできなければ、その役割は妻と子どもに託される。さらに、階層が下がり、仮に妻が顕示的閑暇をあきらめ就労せざるを得なくなっても、顕示的消費はほそぼそと行われつづける。もっと下の極貧層の場合はどうか。ヴェブレンは、夫と子どもたちがこの習慣を断念しても、妻だけは家族を代表して最後のささやかな贅沢を実行するはずだと書いている。

高度に組織化された産業社会では、良い評判が究極的に依拠している基礎は、結局は財力である。…どんな社会階級であっても、最も絶望的に貧しい人であっても、お決まりの顕示的消費を一切せずに我慢することはない。このカテゴリーの消費の項目が完全に打ち切られるのは、やむにやまれぬ必要に迫られたときだけである。ちっぽけな安物の装身具をあきらめ、金のあるふりをするのをやめる前に、ありとあらゆる不潔と不快が耐え忍ばれるだろう。みじめにも物質的な欠乏に屈して、こうした高級ないし精神的な必要の一切の充足を断念してしまった階級や国など、一つとして存在しない。(Veblen 1899, 84-85/ 訳 90)

『有閑階級の理論』は一見すると上流階級の生活様式を主題としているようにみえるが、実際には、このように、中流階級や下層階級の暮らしについてもかなりの紙幅を割いていることに注意しなければならない⁹⁾。

では、貧しい階級がやむをえず顕示的消費をつづけることで、彼らの人生にどのような問題が降りか

9) ヴェブレンは1891年にコーネル大学で研究生をした後、1892年にラフリンに連れられてシカゴ大学へ奉職したが、この頃から経済学者として本格的な執筆活動を始めたと言われている。特に、『有閑階級の理論』が執筆された1890年代半ばは、『*Journal of Political Economy*』の編集者を務め、社会主義論を中心に書評を書き続けていた。この頃、彼は小麦の価格変動および供給に関する実証的論文を2本発表した。特に中西部の農民と都市労働者の現状に対して強い関心を抱いていたことがうかがえる。Cf. Dorfman (1972), Viano (2009)。さらに、Rezneck (1953) から分かるのは19世紀末アメリカの深刻な不況であるが、それに対してもヴェブレンはいくつかの論稿を書いている。例えば、小論“Army of the Commonwealth”は、同年ワシントンにおいて生じた失業者による大規模デモに対するコメントである。また、高 (1991, 89) は、『有閑階級の理論』に託された真の分析対象は、有閑階級ではなく中流階級＝大衆であったと解釈する。

かるのだろうか。見栄をはるための無駄な消費はいったんそれらの項目が生活の一部になってしまうと、もはやそれらをなしで済ますのは難しくなる。現代では、「見せびらかすための無駄だが尊敬に値する支出は心の満足を与えてくれるのであり、身体的な満足や生命維持に限られる『低級な』欲望を満たす支出の多くに比べてより不可欠になりつつある」（Veblen 1899, 103/ 訳 106-107）からである。生活水準を上げるのは簡単だ。しかし、それを下げるのは難しい。ヴェブレンは、このことから、「一般に私たちの努力を導く支出の基準は、すでに達成されたいつもの支出の平均値ではなくて、ちょうど手が届かない、あるいは、少し背伸びすれば手の届きそうな消費の理想である」（Veblen 1899, 103/ 訳 107）と結論づける。すぐ上を見て出し抜きたいと駆り立てられることはあっても、最高峰を見て競り合おうとしたり、下を見て張り合おうとする気持ちはなかなか湧いてこない。このことは、勤労階級にもあてはまるという。

そもそも勤労階級の人々は、社会の生産性が向上し、少ない労働で生計を立てられるようになったとしたら、労働時間を減らし、健やかなスローライフを楽しむ道を選ぶだろうか。ヴェブレンはこの可能性をきっぱりと否定する。なぜなら、彼らは、顕示的消費をさらに増やす方向にエネルギーを注ぐようになるからであり、そのためなら以前と同じようにあくせく働き続けるからである。

かくして、産業効率が向上して過労を減らせるようになっても、いっこうにストレスは減らず、生産高の増加分は、結局はこの欲求〔顕示的支出——引用者〕を満たすために使われることになる。そして、この欲求たるや、経済理論上、通常はより高級で精神的な欲求のせいにされるような仕方で無限に膨張する。J. S. ミルが『かつてなされた機械の発明のすべてが人類の日々の労苦を軽くしたかどうかは、いまだ疑わしい』と述べたのは¹⁰⁾、生活水準にこうした要素が含まれているからである。（Veblen 1899, 111/ 訳 114）

したがって、ヴェブレンは、顕示的消費の原理が浸透することによって、人口は減少する傾向があると論じる。顕示的消費は他人に見せびらかす目的で行われる。結果として、他人に見えるところを中心に支出がなされることになる。そのことは、裏を返せば、他人の目に付かない部分への支出は節約されることを意味している。したがって、「ほとんどの階級で、世間の目の前で営まれる公の生活の華々しさに比べ、家庭生活はみすばらしくなるということが起こる」（Veblen 1899, 112/ 訳 115）。そして、当然、そうした人々は、子どもを産む数も減らすだろう。

評判の良い支出をすることを迫られている階級で出生率が低いのは、顕示的浪費¹¹⁾の生活水準を維持しなければならないことに起因している。顕示的消費に加えて、子どもを立派に育てるのに必要な支出が重なれば、相当な負担となる。これが、子どもを持つことの大きな抑止力となる。おそらくこの要因は、マルサス主義の慎慮による妨げ（Malthusian prudential checks）のなかでもっとも効果的といえよう。（Veblen 1899, 113/ 訳 116）

¹⁰⁾ Mill (1965, 756/ 訳 109)。『経済学原理』第四編第六章「停止状態について」の一節である。ただし、ヴェブレンの解釈は消費者側に原因を求めており、少数派の企業家が発明の果実を独占しているから人々の労苦が減らないとするミルの原文の文脈と比べると若干ニュアンスが違っている。

¹¹⁾ 顕示的消費と顕示的浪費（waste）という表現はほぼ同義であり、別の概念として明確に書き分けられているわけではない。両者の区別を重視している研究としては、Watkins (2019) と高 (1991) 第3章を挙げておきたい。

このように、顕示的消費の原理はゆたかな有閑階級のみならず、ほとんどの階級の人々にとって至上命令であり、出生率低下の原因にすらなりうるというのがヴェブレンの見方であった¹²⁾。しかし、最後のマルサス主義への言及はどのように解釈すべきだろうか。顕示的消費の原理と慎慮とを結びつけたヴェブレンの意図を浮かび上がらせるのが、次節の課題である。

III 高級であることの意味

マルサスは、人口が減少しうる原因の説明において、予防的妨げの一例として慎慮による抑制を挙げた。だが、それは、第二版以降、処方箋のような意味合いが付加され、道徳的抑制とも言い換えられるようになった¹³⁾。そして、マルサスが道徳的抑制について語る時、第一義的には、それは貧民の境遇を改善するための方法であった。道徳的抑制、すなわち「われわれが家族を扶養しうる状態になるまで結婚を差し控え、その間完全に道徳的な行動を取ることに」(Malthus [1826] 1996, 283/ 訳 550) により、貧民は自らの人生をより快適なものにすることができる。このように、一般に、貧民救済論の文脈では、多少の例外はあっても、上流階級はその社会の道徳規範形成の担い手とされるのが暗黙の了解であろう。それに対して、下層階級は、道徳的資質の点で未だ不十分な存在として描かれやすい¹⁴⁾。

J. S. ミルの場合は、上流階級に対する評価では、マルサスに比べてより懐疑的である。貧しい労働者の望ましい社会的地位に関して従属保護論ではなく自立論を採るミルにとっては、「労働しない『階級』というものをもっている社会状態、いやしくも人生の必要な労働の分担分を負担することを免れているような人間がいるような社会状態」は、「公正」でないどころか、「有益」でもないし、「甚だしい社会悪」にほかならなかった (Mill 1965, 758/ 訳 112)。とはいえ、「豚の哲学」という批判をかかわすためにミルが書いた『功利主義論』(1861)における次の一節には、人間の道徳的資質についての彼の認識がにじみ出ている。

エピクロス派の生活を獣の生き方と同じものとみて品がないと感じられるのは、獣の快樂では、どうにも人間の幸福概念を満足させないからである。人間は動物的な欲求を超えた高尚な能力をもつ。そして、一度その能力を自覚すれば、それらを満足させないようなものを幸福とは考えなくなる。(Mill 1969, 210-211/ 訳 26)

この文脈では、人間の階級間の差異は問題にされていないが、ミルの功利主義は、このように「精神的な快樂を身体的な快樂以上に尊重する」立場に立っている。そして、精神的な快樂は、「知性、感情、想像力、道徳感情の快樂」とも言い換えられている (Mill 1969, 211/ 訳 26-27)¹⁵⁾。仮に人間の幸福概念

¹²⁾ 石光 (1968) によれば、国勢調査局が連邦政府の正式な機関として設立されるのが1902年、出生統計が登録され始めるのが1915年であった (しかも一部の州のみ)。『有閑階級の理論』が執筆された1890年代には正確な出生統計は存在しなかったことを付記しておきたい。

¹³⁾ マルサスは、『人口論』初版に対するゴドウィンからの反論を受けて、人口増加を現実抑制するものとして、初版で挙げていた悪徳と貧困に加え、道徳的抑制を導入したと言われている。(渡会 1997, 1)

¹⁴⁾ ただし、上流階級が常に道徳的な人々によってのみ構成されているとマルサスが考えていたわけではない。例外としては、第二編第八章における「不義密通にふける上流階級」の人々への言及などが挙げられる。(Malthus [1826] 1996, 397/ 訳 273)

¹⁵⁾ 米原 (2013) によれば、ミルが高級な快樂を低級な快樂を望ましいとみなした理由には複数の解釈があるという。

を満たす能力の高低が、その道徳的資質の高低と相関するなら¹⁶⁾、精神的な快樂をよりいっそう享受できる階級は道徳的資質の点においても優っているということになるかもしれない。

この点において、ヴェブレンは、古典派経済学者たちとは一線を画している。というのは、彼は、上流階級であるか下層階級であるかを問わず、道徳のないし高級とされている生活様式それ自体を進化論的に考察したからである。進化論的ということの意味は、自らの価値観はもちろん、社会通念上常識とされている価値観からも自由であることを意味している。つまり、彼の分析においては、道徳に関する観念は歴史的に可変的かつ相対的であり、固定された内容をもたないことに留意しなければならない¹⁷⁾。

では、こうした古典派経済学者たちとの違いを念頭に起きながら、ヴェブレンの消費理論に再び目を向けてみよう。すでに述べたように、顕示的消費は他人から見える部分により費やされる傾向がある。したがって、彼は、その手段としてもっとも有効なのは衣服であると主張する。衣服は一目瞭然であり、見知らぬ人にも見せびらかすことができるからである。「近代社会では衣服に使われる財の商業的価値は、着用者の身体を覆うことで自動的に与えられる恩恵よりも、その財が流行に乗っていると評判になるとかいったことにはるかに左右されやすい」のであり、「衣服は『高級な』理由から、すなわち精神的な理由から必要とされている」(Veblen 1899, 168/ 訳 168)。流行に乗った評判のよい高価な衣服の購入は、こうして、上流の有閑階級の生活様式とゆるやかに結びつけられ、高級な選択とみなされるようになるだろう。

そして、ヴェブレンの考察では、社会進化の過程で形成される人々の主要な価値観は、消費を始めとする経済行動のみならず、社会におけるさまざまな行為一般にも影響を及ぼすようになる。「顕示的浪費の原理は、生活や商品の何が本物で何が評判を得られるかについての思考習慣の形成を導く」のであり、この原理は他の諸規範にも入り込んでいく。その例としては、「義務感、美意識、効用の感覚、信仰や儀式の妥当性の感覚、および真理に関する科学的感覚」(Veblen 1899, 116/ 訳 119)などが挙げられている。「社会生活の主要な経済的および法制的特徴が私的所有の制度である現代社会では、道徳規範の際だった特徴の一つは財産の神聖視となる」(Veblen 1899, 117/ 訳 119-120)。つまり、ある規範がいかにも有閑階級の価値観に合致し、その社会において道徳的であると見なされているとしても、「安かろう悪かろう」という格言に象徴されるような金銭重視の先入観に浸食されうることになる。

そのような見解を示したうえで、ヴェブレンは、有閑階級の行為規範と道徳的な価値観との関係について次のような議論を展開している。有閑階級の消費項目には、彼らの価値観に合致した品目であり

高級な快樂は低級な快樂に比べ量が大きいゆえに望ましいとしたという解釈の他、前者が後者に比べ質の点で優れているゆえに望ましいとしたという説明、そして、低級な快樂を得ようとしたときに被る苦痛の存在ゆえに、前者を後者より望ましいとしたという説明がある。

¹⁶⁾ ミルは『自由論』(1859)では、人間ならではの精神的能力として「知覚、判断、識別感情、精神的活動および道徳的な優先順位付け」を挙げているが、それらは、「筋肉と同じように使うことによるのみ鍛えられる」ものでもある(Mill 1977, 262/ 訳 131)。なお、ミルの高次快樂の源泉については、水野(2014)が詳しい。

¹⁷⁾ 道徳的資質の点に関する上流階級と下層階級のコントラストは、おそらく古典派経済学者たちに共通であろう。例えば、それはマーシャルの議論にも見られる。近藤(1997, 21)によれば、マーシャルは「労働者階級が貧困状態から抜け出し自立する条件」として、彼らが「生活基準」という考え方を身につけることを求めた。貧民たちは賃労働に就くことで、教育が中断され、高次の能力を伸ばす機会、人間的進歩の機会を逸してしまうからだ。柳田、諸泉、近藤(2013, ii)によれば、マルサス、ミル、マーシャルらは、高賃金が労働者の人間的進歩をもたらし、高い生産性を実現していくと確信していた。この解釈によれば、彼らは、労働者階級が漸次中流階級ないしは紳士階級へと上昇しうると期待していたということになる。

ながら、道徳的であるかどうかの判断が難しい項目も存在している。有閑階級の趣味に関して、例えば、極上の食べ物、稀少な装飾品はともかく、酒や麻薬などの中毒性のある刺激物はどうか。

酩酊状態や刺激物を好きなだけ摂取するせいで生じる病的な症状は、今度はそれが尊敬に値すると受け取られるようになる。そうした症状は、転じて、そうしたものに耽溺できるだけの優れた身分である証拠となるからである。(Veblen 1899, 70/ 訳 77)

ヴェブレンの顕示的閑暇の原理にもとづけば、生産的労働を免除されていることは有閑階級に属す証であり、社会的に尊敬されるために欠かせない条件であった。酒や麻薬におぼれることもその目的に合うかもしれない。だが、こうした有閑階級の価値観は道徳的といえるか。いや、経済学史上、酒に溺れる墮落者像は下層階級の典型ではなかったか。このように、ヴェブレンの考察には、偶像破壊の爆薬のようなものがそこかしこに仕込まれており、道徳的なものが歴史的産物にすぎないという事実を突きつける。古典派経済学者たちが描く像とは異なり、ヴェブレンのテキストにおける上流階級の道徳的資質はなぜかこころもとなく映るのである。

したがって、一般的に社会貢献と考えられている上流階級の行動についても、ヴェブレンの評価はきわめて冷徹であった。例えば、アメリカの大富豪が大学や美術館を建設する目的には、そのすべてではないにしても、金銭的な評判を得るための動機が紛れ込んでいる。そうでなければ、建物に自分の名前を付けたり、その機能以上に豪華すぎる装飾を施す理由は説明できないという。上流階級の女性たちが慈善活動や社会改良運動に献身する目的も似たような側面を持っている。これらは、本源的に有閑階級制度にそなわっている略奪的性格——張り合う本能的気質に由来する——とは無縁であるように見えるが、しかしながら、「通例、この種の活動に向かおうとする気持ちに、異質な動機——自己本位の動機や、とりわけ妬みを起こさせようと差別する動機——が入り込んでいることは、物笑いの種になるぐらい十分周知の事実」(Veblen 1899, 340/ 訳 329)である。

顕示的消費といえば、贅沢な奢侈的消費を想起させる。だが、こうした文脈から判明するのは、そういう典型的な行動だけが取り上げられているわけではないことである。顕示的消費は、むしろ現実の場面では、利他的な動機や、礼節を守ったり道徳規範を遵守したりする動機なども渾然一体と混じり合いながら、人々の行動として表出されていくのである。

IV 貧富の格差が拡大すると、なぜ社会改革は行き詰まるのか

ヴェブレンが生物進化論に学ぶことにより、経済学方法論を刷新しようとしていたことについてはすでにふれた。それによれば、自然界の進化と同じく、社会の進化も選択と適応のプロセスである。ここで議論されている社会の進化において、選択されたり淘汰されたりするのは制度や思考習慣であり、人々はその変化に適応しようとする。しかし、社会の進化はつねに前に向かって進むだけではない。

発展の一步が踏み出されたとき、その一步自体が新たな適応を要求する状況の変化の一部となる。そして、その一步は調整過程で次の一步の出発点となる。それが果てしなく続くのである。(Veblen 1899, 191/ 訳 191)

そして、大切なのは、いくら前に進もうとしても、前に進んだと思っても、決して目的地には到達しないという現実である。なぜなら、制度や思考習慣は過去の状況に適応して生じた過去の産物であるため、現在の状況に完全に合致することはありえないからである。つねに古い足かせがはまったまま進むしかない。こうした人類史の理解がヴェブレンの社会進化観の基礎にある。

ヴェブレンが『有閑階級の理論』において繰り返しかし主張したことの一つに、有閑階級は保守的であるという主題があるが、上記の社会進化観を想起すれば理解しやすいだろう。それによれば、有閑階級制度自体が、人間の性格形成に関して古い精神を存続させたり回帰させたりする傾向をもっている（Veblen 1899, 213/ 訳 210-211）。それに加えて、有閑階級は環境の変化に適応しなくても存続しうる位置にいるという。

何らかの社会集団あるいは階級が本質的な点で環境の作用から遮断されていたら、その社会集団や階級は、変化する全般的状況にその考えや生活様式を適応させるのは一段と遅くなるだろう。そうであれば、社会の変化のプロセスも遅れることとなる。そして、富裕な有閑階級は、変化や再調整を生じさせる経済的要因に関して、まさに遮断された立場にいるのである。（Veblen 1899, 193/ 訳 192）

しかし、富裕層が保守的だという解釈は誰もが耳にするありふれた説明かもしれない。ただし、ヴェブレンは、富裕層が既得権益をもっているがゆえに、現状維持にこだわり革新に反対するというやっかみ半分の説明を行っているわけではなかった（Veblen 1899, 199/ 訳 197）。なぜなら、保守的とされたのは有閑階級だけではないからである。つまり、慣れ親しんだ習慣から離れて新たな生活に順応するのが苦痛であり不快であるのはみな同じなのだ。だが、有閑階級だけは、経済的な圧力にさらされていないがために、適応しなくても存続しうるという解釈なのである。

人は誰でも保守的であるとすれば、環境の変化に適応できる人々というのはどのような人々なのだろうか。上記の引用にもあるように、現代の産業社会においては、制度や思考習慣の適応を促す要因は概して「経済的要因」である（Veblen 1899, 195-196/ 訳 194）。このことを先の問いに重ねてみると、そのような人々とはつねに生計の手段を得るために働くことを迫られている人々ということになる。そのような人々であれば、「受け継がれてきた生活様式を再建し、新しい標準を最も容易に受け入れさせる最強の誘因」（Veblen 1899, 195/ 訳 194）を有するし、もたざるをえないということなのだろう。

こうしてみると、一つの対立構造が浮かび上がってくる。それは、保守は上流階級の特徴であり、革新は下層階級の特徴という対立構造である。しかし、ヴェブレンは、こうした単純な対照は正確ではないと考えていた。新しい環境に適応するためには、かなりの精神力を要すると考えられるが、こうした再調整を乗り越えるためには、生存のための日々の闘争で吸い取られる以上のエネルギーが残っていないなければならない。したがって、次のような結論が導かれる。

進歩を阻むのは不満が生じる余地をすっかりなくしてしまえるような贅沢な暮らしだけではない。飢えや過酷な身体的辛苦もまた進歩を着実に阻害する。極貧に喘ぎ、日々を生き延びることにエネルギーを全部吸い取られてしまう人々は、みな保守的である。なぜなら、明日より先のことを思慮する力が残っていないからだ。これはまさにとてもゆたかな人々が、今日おかれている状況に不満を覚える必要が小さいがゆえに保守的になるのと同じことである。（Veblen 1899, 204/ 訳 202）

保守派は一層ではないというこの指摘は、社会全体の福祉を考える上で看過しえない重みを放つ。すでにふれたように、有閑階級制度がもたらした顕示的消費の原理は、極貧の人々にとっても至上命令なのであった。結果として、有閑階級制度は貧しい人々の必需品の消費を切り詰めさせ、彼らから生計手段を可能な限り取り上げることによって、彼らのエネルギーを着実に奪っていく。そして、極貧の階級の人々は、勤労階級の人々とは異なり新たな思考習慣に適應しようと学ぶ余裕もない。すると生じてくるのは、上流階級と最下層階級の奇妙な同化現象にほかならない。ヴェブレンによれば、この問題の影響は社会全体にとっても甚大である。というのは、最上層が富を蓄積する一方で下層が貧困化し、その格差が拡大するとき、人々がいかに社会改革の必要性を痛感しようとも、それは概して頓挫しやすいということになるからである。ここに大きな逆説が立ちはだかる。すなわち、貧しい人々は彼ら自身が保守的であるがゆえに、自分たちの暮らしを改善するための社会改革の障害となるという逆説である¹⁸⁾。

慣習のトリクルダウンは存在している。だが、富のトリクルダウンは幻想にすぎない。ヴェブレンの消費理論は、制度の進化とその保守性に着目することによって、富の不平等な分配が社会改革を妨げるこうした側面を巧にあぶりだしている。こうしてみると、有閑階級制度や顕示的消費の原理が下層階級にもたらす影響は、生活必需品を超える消費を行う習慣を教えるだけではなかったということが分かる。これらの制度や原理は、彼らの思考力を砕き、社会改革を遅延させる片棒を担ぐからである。さらに、これまでの議論から明らかになったのは、ヴェブレンの社会進化の説明が、環境に適應できる強者が生き残り弱者が淘汰されるという典型的な適者生存の概念とはかけ離れているということである。ヴェブレンの描いた社会進化のプロセスでは、第一に、新たな環境に果敢に適應しつづけるのは基本的には弱者だったからであり、第二に、強者はたえず現状を維持するために頑なに保守主義にしがみつきのみならず、社会の最底辺に保守の分厚い第二層を養い育てるからである。

V 有閑階級制度がもたらす経済効果

『有閑階級の理論』の序文で、ヴェブレンは、本書の目的が「現代の生活における経済的要因としての有閑階級に着目し、その位置と価値を論じること」にあると述べていた。前節で取り上げてきた文脈において、その答えが出されている。「かくして、有閑階級の制度は、直接的には、(1)この階級に固有の動きの鈍さによって、(2)顕示的消費と保守主義の規範的な手本であることをつうじて、そして、(3)間接的には、この制度そのものが依拠する富と生活手段の不平等な分配をつうじて、文化の発展を阻害する。」(Veblen 1899, 205/ 訳 203)

ただし、有閑階級制度の弊害はそれだけではない。ヴェブレンによれば、「有閑階級制度は、社会の産業効率(industrial efficiency)を押し下げ、人間本性が現代の産業活動の要請に適應するのを遅らせる方向に作用する」(Veblen 1899, 244/ 訳 239)のであり、これがもう一つの弊害であると考えられる。ここで注意しなければならないのは、彼の議論においては、産業効率の上昇は単なる生産増を意味しているわけではなかったということである。その意味するところは、むしろ必要なものを必要な分だけ効率的に生産する、無駄のない生産管理というイメージに近い。というのは、ヴェブレンは、産業的な意味における効率性を自らの効用や利潤の最大化を第一とする「経済人」の金銭的な効率性(pecuniary

¹⁸⁾ 最上層と最下層の同化というテーマは『有閑階級の理論』において繰り返され論じられている問題である。飲酒や麻薬に耽溺する、決闘が好き、酒や煙草をおごることを好む、賭け事を好む、迷信を信じる、宗教を信じる、スポーツや狩猟を愛好する、などの行為が事例として挙げられている。

efficiency）とは概念的に区別していたからである¹⁹⁾。したがって、この議論を敷衍すると、次のような問題提起を拾い上げられるかもしれない。

有閑階級制度が社会の産業効率を押し下げるといふ指摘は、この制度が支配的でなければ、産業効率は相対的に高かったであろうという予測を含んでいる。また、ヴェブレンにとって、顕示的消費は日常語における浪費（waste）と同義であり、「全体としての人間生活ないし人間の福祉に役立たない」支出を指していた（Veblen 1899, 97/ 訳 102）ことを考え合わせれば、上記の指摘には次のような考察も含むかもしれない。もしも顕示的消費の原理が支配的でなかったら、これほどの浪費は生じなかっただろう。さらには、もしも顕示的消費の習慣がなかったら、より実用的な消費財が安価に生産され、消費者はその恩恵にあずかったかもしれない。しかし、こうした論点は、消費一般と顕示的消費とを区別しない経済理論では掲げられることすらないという問題を、ヴェブレンは提起したのではなかったか。

消費者がどのような形態の支出を選択しようとも、彼がどのような目的を追求し彼の選択を行おうとも、それは、彼の選択だから彼にとっては効用を有するのである。固有の経済理論の範囲内では、個々の消費者の観点から見れば、浪費性（wastefulness）という問題は生じないのである。（Veblen 1899, 98/ 訳 102-103）

生産および産業効率に関わるこれらの考察は、およそ5年後に出版された『営利企業の理論』（1904）においてより明確に展開されることとなった。本書の主題は企業行動であり、そこでは消費者は助演者である。しかし、二つの著作を接続してみると、顕示的消費に明け暮れる消費者の真向かいには、他企業との競争に打ち克つために莫大な費用を——効率的な生産ではなく——広告に費やす営利企業が立ちはだかっているという構図が浮かび上がる。顕示的消費の原理は消費のみならず生産の領域においてもこうして作用している。あらゆる商品において、顕示的消費の原理にもとづく生産計画が実行されたらどうなるだろうか。無駄のない効率的な生産管理が行われることはなく、資源は浪費され、消費者は高すぎる価格を払い続けることになる。

ただし、このような仕方では有閑階級制度の弊害を論じたけれども、ヴェブレンが打ち出すのは、彼の考察が「道徳的に中立な」考察であり、そこには有閑階級や営利企業を非難する意図は含まれないという立場である。

この階級〔有閑階級——引用者〕の特徴的な姿勢は、『存在するものはすべて正しい』という格言に集約できよう。他方で、自然選択の法則を人間の制度に適用すると、『存在するものはすべて悪い』という格言になる。…ここで使われた『正しい』とか『悪い』という表現には、いうまでもなく、あるべきことやあるべきでないことに関する意見は一切含まれていない。これらの表現は、（道徳的に中立な）進化論の立場からのみ使っており、実際の進化のプロセスに適合するかしないかだけを意味することを意図している。（Veblen 1899, 207/ 訳 204-205）

¹⁹⁾ 二つの効率性の概念については、例えば、『有閑階級の理論』の第9章を参照。「したがって、もしも金銭的な効率性が全体として産業的な効率性と両立しないという事実が存在しなければ、あらゆる職業の選択的作用は金銭的気質が容赦なく支配する傾向をもつだろう。その結果が、人間本性の正常かつ権威ある類型、すなわち「経済人」として知られているものの導入であろう。」（Veblen 1899, 241/ 訳 236）

とはいえ、それでもなおヴェブレンが「浪費」という言葉を使い、顕示的消費のような経済現象に光を当てようとしたのはなぜだろうか。彼によれば、浪費という言葉を使うのは、「より適切な言葉が他に見当たらないから」であるにすぎなかった (Veblen 1899, 97/ 訳 102)。

経済理論の観点から言えば、この種の消費は、他の消費より正当でもなければ不当でもない。ここで『浪費』と呼ぶのは、この種の消費が全体としてみれば人間の生活や福祉に寄与しないからであって、消費をする本人にとって労力やお金の無駄遣いであるとか間違った使い方だということではない。(Veblen 1899, 97-98/ 訳 102)

個々の消費者の行為に対する道徳的ないし倫理的判断を含む言説は、科学者である経済学者には発しえない。しかしながら、この最後の一節において、社会的ないし全体的観点から見て人間の生活や福祉に寄与するかどうかの間われている点を見落とすべきではないだろう。

進化論に依拠したこのようなヴェブレンの経済学方法論を前提とするなら、『有閑階級の理論』は、厳密には、道徳的ないし倫理的観点から見て、この階級や制度が悪であると風刺する議論ではなかったし、政治的ないし法制的観点から見て当時の社会を不正義であると告発する議論でもなかったことを、まずは念頭におかなければならない。しかしながら、その主張は、経済的観点から見れば、有閑階級制度が産業効率を押し下げ、社会全体の物質的福祉の向上を阻害するリスクがあるという予測であったということができよう。もちろん、その経済効果は、産業効率の上昇や社会全体の物質的福祉の向上を正の効果と捉えるならば、負の効果ということになる。

では、有閑階級制度が支配的である世界が仮に一種のディストピアであるとすれば、そこから抜け出す道はいっさい拓かれないのだろうか²⁰⁾。実際には、ヴェブレンは、その文量はわずかであるものの、有閑階級制度が不要となる未来についても語っている。

商取引が素早くなされるようになると、産業活動やそれ以外の活動が心の動揺をそれほど与えずに進められるようになるだけではない。日常の実務において抜け目なく識別するための様々な障害や厄介な問題が取り除かれれば、資産階級自体を不要とするよう作用する。金銭取引がルーティン化されるやいなや、産業の将帥はいなくてもかまわなくなる。言うまでもなく、そうした境地ははるか先の未来のことである。今日では、金銭的利益に適うような制度の改善は、他方では将帥を『魂のない』株式会社に置き換えようとし、それゆえ所有という有閑階級の重要な機能を不要にする方向に進んでいく。(Veblen 1899, 210-211/ 訳 208-209)

有閑階級制度のように強力な制度が、換言すれば、古い人間本性に根ざした保守的な思考習慣が廃れ始めるのはなぜか。その原因の最たるものは経済的要因、特に産業活動に関わる新しい思考習慣の浸透で

²⁰⁾ ヴェブレンは顕示的消費の原理が社会に恩恵をもたらすという考えを拒絶したとする解釈は、Watkins (2019) によっても提示されている。ただし、正確には、有閑階級制度の経済効果のすべてが負の有害な効果であるという断定的評価が下されているわけではないことも付記しておこう。「有閑階級が実行する抑圧は有益なこともあればそうでないこともあろう。ある状況で有益かどうかは、決疑論的な問題であり、一般理論の問題ではない。」(Veblen 1899, 206/ 訳 204) ただし、「現代社会における集団の利益は産業効率にかかっている。一人一人は俗にいう生産的職業において発揮される効率性に比して社会の目的に貢献しているのである。」(Veblen 1899, 227/ 訳 223)

あるという。こうした影響がじわりじわりと入り込むことで、金銭的取引の側面においても産業効率が重視されるようになる。それによって、有閑階級制度、および、そのいくつかの重要な機能が解体されていくはずだというのである。

おわりに

本論文では、ヴェブレンの消費理論、とりわけ顕示的消費を説明する論理の構造を確認するとともに、その射程について考察してきた。この場合の射程とは、彼がどのような経済現象に光を当てようとしたのかということであり、換言すれば、消費を論じることによって彼がどのような問題を提起しようとしたのかということである。ここで要点をふりかえると、おおよそ次のようになるだろう。

まず、ヴェブレンは、人はなぜ消費するのかという根本的な問題を問い直していた。その議論によれば、財の獲得および蓄積の目的を消費と措定するだけで、その行動を引き起こす原因にまでは踏み込まない従来の経済学を乗り越えようとする必要があった。彼の見方では、行動を説明するには人間の根源にある本性ないし本能に立ち戻らなければならないのであり、獲得および蓄積の目的は“張り合い”だとされた。このような論理を用いることで、主体的に富を見せびらかす富裕層だけではなく、受動的に世間体を維持するしかない他の人々の消費行動をも同一の原理により説明することが可能となっていた。また、こうした人間観を拠り所にしてきたからこそ、ヴェブレンは消費と社会的承認の関係を正面から扱うことができたということもできるだろう。張り合いの概念には、社会における他者の存在が予め前提されているからである。昨今では、ヴェブレンの顕示的消費の理論は、現代の消費行動を説明するにはもはや古いという批判も散見されるが、それでもなお彼の理論に有効性が見出せるとすれば、その根底にある人間本性論に何某かのリアリティが存するからかもしれない²¹⁾。

そして、もう一つの問いは生活水準をどのように定義するかであった。ヴェブレンにとって、生活水準は、所得額や消費量のように貨幣額で表記できるような量的な概念というよりはむしろ、社会的および文化的な概念を包含しており、教養や嗜み、礼儀やマナーに精通している水準なども包含するより広い概念であった。結果として、それは、コンフォート＝快適さの水準にとどまるのではなく、ディセンシー＝品位ないし体裁を保つための水準を含むこととなった。それゆえ、多寡にそれぞれ違いはあっても、最低限の生活必需品に便宜品や奢侈品が加わっていく。そして、この点に関して本稿において示したかったのは、顕示的消費という一つの原理について論じながらも、その社会的影響は単一ではなかったということである。ヴェブレンは、上流階級はもとより、勤労階級に対する影響、下層階級への影響、極貧の人々への影響というように、さまざまな社会階級の受け取り方を子細に書き分けていた。その意味では、顕示的消費論が有する一般的イメージは再考の余地があるかもしれない。その場合の一般的イメージとは、顕示的消費は上流階級の行動様式の一例であり、それ以外のすべての階級が同じくそれを

21) 例えば、Trigg (2001, 99) は、顕示的消費理論に対して今日提出されている批判を次の3点にまとめている。(1) 現代では、顕示的消費行動のトリクルダウンは観察されなくなっている(ベースセッターが社会ヒエラルキーの低層から出現することもある)。(2) 現代では、消費者が地位を表示する方法は繊細かつ洗練されたものになりつつあり、あからさまに富を顕示する行為は減ってきている。(3) 現代では、消費行動パターンは所属する社会階級ではなく、社会ヒエラルキーとは無縁のライフスタイルにより選択されることが多くなっている。また、おおよそヴェブレン、ボードリヤールおよびガルブレイスを起点として、消費社会を論じる「思考の枠組み」がどのように推移してきたかについては、橋本(2021)の整理が参考になる。本書の主部分には現代日本を対象としているが、K. ソーパーやD. ミラー等、最前線の消費社会論についての紹介もある。

模倣しているというものであり、この解釈は正確ではない。

それでは、ヴェブレンは、以上のような議論を下敷きにして、どのような経済現象に光を当てようとしたのだろうか。顕示的消費という言葉の知名度の高さからは想像しえないが、これまでこの問いは意外にもあまり掲げられずにきたように思われる。本稿において取り上げたのは、おおよそ次の四つの現象である。第一に、顕示的消費の原理は出生率の低下をもたらす。第二に、顕示的消費の原理を含む有閑階級制度は、上層と底辺層をともに保守的にする。第三に、二つの保守層は、社会の福祉を阻害し、改革を遅延させる。第四に、有閑階級制度は、そのようにして、文化の発展を遅らせるとともに、産業効率を押し下げ、人々が産業活動の要請に適応するのを遅らせる。

こうしてみると、ヴェブレンは、『有閑階級の理論』において顕示的消費という経済行動に光を当てたが、彼の議論は消費理論という小さな枠組の中にとどまらないことは明らかだろう。経済的な価値観は、人々が抱く他のさまざまな価値観にも深く根を下ろし、その社会の習慣や慣習を形づくり、道德規範を構成し、諸制度および法制度を形成するさいにも大いに作用する。このこともまたヴェブレンの強調点の一つであった。それゆえに、価格が高いゆえに選好される財やその効果などの定義は、顕示的消費の定義としてはあまりにも狭すぎることはいうまでもない。ヴェブレンオリジナルのその概念においては、少なくとも、消費行動や企業行動というミクロの現象は社会全体の福祉というマクロの現象と表裏一体となっており、お互いにかなる正負の相互作用がありうるかがつねに問いただされていたからである。

謝 辞

本論文は、日本大学経済学部経済科学研究所の「若手研究者科研費応募支援プログラム」の成果物である。

参考文献

- 石田教子「ヴェブレンの人類学的知見に関するノート」『経済集志』第86巻第4号、2017年、31-44頁。
- 石田教子「『経済人』という人間本性概念を乗り越える——ヴェブレンの経済学リハビリテーション・プラン」只腰親和、佐々木憲介編著『経済学方法論の多元性——歴史的視点から』蒼天社出版、2018年、281-311頁。
- 石光亨「アメリカ合衆国における出生率低下の現状と解釈」『国民経済雑誌』第118巻、第2号、1968年、33-54頁。
- 近藤真司『マーシャルの『生活基準』の経済学』大阪府立大学経済研究叢書、第85冊。
- 高哲男『ヴェブレン研究——進化論的経済学の世界』ミネルヴァ書房、1991年。
- 水野俊誠『J. S. ミルの幸福論——快樂主義の可能性——』梓出版社、2014年。
- 橋本努編『ロスト欲望社会——消費社会の倫理と文化はどこへ向かうのか』勁草書房、2021年。
- 柳田芳伸、諸泉俊介、近藤真司編『マルサス ミル マーシャル——人間と富との経済思想』昭和堂、2013年。
- 米原優「ミルの快樂説——高級な快樂が低級な快樂より望ましいのはなぜか」『静岡大学教育学部研究報告 人文・社会・自然科学篇』第64号、2013年、47-59頁。
- 渡会勝義「マルサスの経済思想における貧困問題」『一橋大学社会科学古典資料センター』Study Series No. 38、1997年。
- J. Dorfman, *Thorstein Veblen and His America*, Seventh Edition with New Appendices, Clifton: Augustus M. Kelley Publishers, 1972. 八木甫訳『ヴェブレン：その人と時代』ホルト・サウンダース・ジャパン、1985年。
- S. Edgell, "Veblen's Theory of Conspicuous Consumption After 100 Years", *History of Economic Ideas*, 7(3), 1999, pp. 99-125.
- H. Peukert, "The Paradoxes of Happiness in an Old Institutionalist Perspective", *Journal of Economic Issues*, 39(2), 2005, pp. 335-345.

- T. R. Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 6th edition, 1826, London: Routledge/ Thoemmes Press, 1996. 大淵寛ほか訳『人口の原理』第6版, 中央大学出版部, 1985年.
- R. S. Mason, *The Economics of Conspicuous Consumption: Theory and Thought Since 1700*, Edward Elgar, 1998. 鈴木信雄, 高哲男, 橋本努訳『顕示的消費の経済学』名古屋大学出版会, 2000年.
- J. S. Mill, *Principles of Political Economy with Some of Their Applications to Social Philosophy*, in *The Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. 3, Toronto: University of Toronto Press, 1965. 末永茂喜訳『経済学原理』(四) 岩波書店, 1961年.
- J. S. Mill, *On Liberty*, in *The Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. 18, Toronto: University of Toronto Press, 1977. 関口正司訳『自由論』岩波書店, 2020年.
- J. S. Mill, *Utilitarianism*, in *The Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. 10, Toronto: University of Toronto Press, 1969. 関口正司訳『功利主義』岩波書店, 2021年.
- S. Reznick, "Unemployment, Unrest, and Relief in the United States during the Depression of 1893-97", *Journal of Political Economy*, 61(4), 1953, pp. 324-345.
- A. B. Trigg, "Veblen, Bourdieu, and Conspicuous Consumption", *Journal of Economic Issues*, 35(1), 2001, pp. 99-115.
- Z. Todorova, "Conspicuous Consumption as Routine Expenditure and its Place in the Social Provisioning Process", *The American Journal of Economics and Sociology*, 72(5), 2013, pp. 1183-1204.
- T. B. Veblen, *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, New York: Macmillan Company, 1899. 高哲男訳『有閑階級の理論』(増補新訂版) 講談社, 2015年.
- T. B. Veblen, *The Theory of Business Enterprise*, New York: Charles Scribner's sons, 1904. 小原敬訳『企業の理論』勁草書房, 1965年.
- T. B. Veblen, *Essays in Our Changing Order*, New York: The Viking Press, 1934.
- F. L. Viano, "Ithaca Transfer: Veblen and Historical Profession", *History of European Ideas* 35, 2009, pp. 38-61.
- J. P. Watkins, "Veblen's System of Conspicuous Waste", *Journal of Economic Issues*, 53(4), 2019, pp. 914-927.